



TITLE:

価値論上のリカアドとマルクス(一)

AUTHOR(S):

堀, 經夫

CITATION:

堀, 經夫. 価値論上のリカアドとマルクス(一). 経済論叢 1920, 11(4): 491-504

ISSUE DATE:

1920-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/127710>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十卷 第四號

論說

農業社會主義論(一).....

法學博士 河田 嗣郎

累進課税の弱點に就きて.....

法學博士 神戸 正雄

支那古來の限田說.....

文學士 小島 祐馬

價值論上のリカアドとマルクス(一).....經濟學士 堀 經夫

人格主義の^{立場に於ける}經濟と人生の^{考察}(二・完).....法學士 石川 興二

時事問題

排日問題に就きて.....法學博士 神戸 正雄

我海運政策に對する國民の反省.....法學博士 戸田 海市

雜錄

三種の「資本論」邦譯.....法學博士 河上 肇

世界戰爭と人口の變動.....法學士 汐見 三郎

朝鮮干瀉地利用論.....經濟學士 三田村 一郎

新著紹介.....法學士 汐見 三郎

價值論上のリカアドとマルクス（二）

堀 經 夫

價值論の歴史に於て、マルクスとリカアドとが密接なる關係を有することは、從來一般に認められ來つた所である。併し乍ら、如何なる意味に於ける密接なる關係が、両者の間に存在して居るか、の點に至つては、諸學者の説が必らずしも一致して居ないやうである。或は、リカアドもマルクスも共に、『凡て勞動に依り再生産され得る商品の價值は、その生産に必要なとさるゝ勞動の分量に依つて定まる。』との同一根本命題に論を起して居るより推して、マルクスは、リカアドの價值論を其儘の形に於て繼承し、而して之を發展且つ徹底せしめたのである、と解釋する學者がある。或は、マルクスの所説とリカアドのそれとは、其外觀に於て甚しく相類似して居るけれども、其實質に於ては全く別種のものに屬する、即ち、マルクスの價值論は、英國正統派の學者殊にリカアドの價值論に着想の端を發しては居るけれども、決して之を繼承したるものではない、寧ろ別種の價值論として之に相對立し得るものである、と考察する學者がある。或は又、リカアドとマルクスとは、其議論の起點に於て同一であるけれども、両者の立場が相違せる爲め、終に其結論に於て相異なる色彩を帯びて來たのである、と判斷する學者がある。此等學者の諸説中、何れを以て正しとなすか、是れ余が本論文に於て研究せんと欲する所である。夫れに先だちて

カアドの價值論の個々の點に就いて一應の吟味を加へ、之をマルクスの所論に比較して置かなければならぬ。

一 リカアドの價值論の諸要點。

マルクスのそれとの比較

(イ) リカアドは、特種の貨物の價值を論じたのであつて、決して總ての貨物に就ての價值論を試みたのではない。彼曰く、

『……………貨物に就て、その交換價值に就て、及びその相對價格を支配する法則に就て論ずるに當つては、吾々は常に、人間の勤勞の働きによつて分量を増加することが出來、又その生産には競争が抑制なしに作用するやうな、そのやうな貨物のみを、意味して居るのである。』¹⁾

是に由て觀れば、リカアドの價值論は、その存在量が極めて稀少である所の貨物、例へば珍稀なる古畫、古書、古錢の如きものに就てはなく、又種々なる意味に於て獨占され居る貨物に就てもなくて、凡そ勞働によつて生産せられ、吾々の需要に應じて自由に増加され得る所の貨物に就てのみ述べられたるものなることが、明かである。

此點は、後にマルクスが、大規模に生産が行はれ、而して自由競争が無制限に作用して居る所の産業社會——即ち資本家的經濟組織の社會——に於て生産さるゝ貨物(マルクスは特に之を商品と稱んだ)を價值研究の對象となしたるを正に軌を一にせる所であつて、兩者の價值論の比較

1) Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gonner's edition, P. 7.

研究には看過すべからざる事柄である。

(□) リカアドは、其『原論』の冒頭に於て、『一貨物の價值は……その生産に必要な労働の相對量に依つて定まる……』との大前提を置いた。此前提がアダム・スミスの所説に其源を發して居ることは、疑を容れざる所であつて、リカアドが、其『原論』の第一章第一節を、主として、スミスの價值論の引用、解説及び批評に當てたることを以て觀るも、此事は明かである。

斯くて彼は、同節に於て、之が生産に「直接労働」のみが用ひらるゝ貨物の價值を論じ、而して同章第三節に於て、之が生産に「直接労働」のみならず、「過去の労働」又は「集積されたる労働」(即ち資本)が用ひらるゝ貨物の價值に就て、説明を加へて居る。即ち第一節に於ては、次のスミスの句、

『資本の集積及び土地の占有の行はれなかつた初期未開の社會狀態に於ては、種々のものを獲得するに必要な労働の分量の割合が、それ等のものをお互に交換する場合に、何等かの標準尺度を與ふることの出来る唯一の事情のやうである。例へば、若し狩獵民族の間に於て、海狸を殺すに、鹿を殺す労働の二倍を要するを常とすれば、一匹の海狸は、自然的に二匹の鹿と交換せらるべきであつて、即ち二匹の鹿の價值を有するであらう。通例二日の、又は二時間の労働の生産物である所のものは、通例一日の、又は一時間の労働の生産物である所のものゝ二倍の價值があるといふは自然である。』¹⁾

を引用し、然る後に、

1) *Ibid.* p. 7.

『人の勤勞によつて増加し得ざる物を除外する限り、勞働が總てのもの、交換價值の眞實の根源であるといふことは、經濟學に於て最も重要な一個の學理である。』¹⁾
 と言ひ、而して第二節に於ては、

『社會の職業の範圍が擴張し、或者は、漁獵に必要な獨木舟及び船具を造り、他の者は、農業に用ひらるゝ種子、及び始めての粗末なる機械を造ると假定するも、尙ほ生産せられたる貨物の交換價值は、その生産に——貨物の直接の生産のみならず、器具、機械を使用する特定勞働を實行せしむるに必要な總ての器具又は機械の生産に——費されたる勞働に比例する、といふ前と同一の原則は、依然として眞實であらう。』²⁾
 と述べて居る。

是に由れば、リカアドの所謂『貨物の生産に要する勞働』とは、貨物の生産に従へる直接なる勞働のみならず、過去に於て道具、器具、機械等に蓄積されたる勞働をも、合せ言ふものなることを知り得るのである。

此點に就ては、マルクスの意見も亦同一である。彼は、

『吾々は、各商品の價值は、其商品の使用價值に體現して居る勞働の分量、即ち其商品の生産上社會的に必要な勞働時間に依つて、決定されて居ることを知る。』³⁾

と述べ、例を紡絲に採つて、其價值が、原料たる棉花並びに勞働要具たる紡錘を造る爲めに要する勞働時間と、棉花を綿絲に造る爲めに要する勞働時間との和によつて、決定さるゝことを説明

1) *Ibid.* pp. 7-8.

2) *Ibid.* p. 18.

3) Karl Marx, *Das Kapital*, I. S. 149. 高島氏譯本(三一七頁)に據る。

して居る。そうして更らに述べて曰く、

『綿絲に含まれて居る總ての勞働は、過去の勞働である。綿絲の諸々の形成要素の生産に要した勞働時間が、より以前に過ぎ去つたもので、過去完了をなして居り、之に反して、結末行程に（即ち）紡績に、直接使用された勞働が、現在により近いものであり、現在完了をなして居るといふことは、全く何うでも宜いことである。』²⁾

(ハ) 貨物の生産に必要な勞働といふも、夫れ夫れ質を異にして居る譯であるが、リカアドは勞働を量的にのみ考察した。勿論彼と雖も、

『……勞働に種々の質のあること、及び一の仕事に於ける一時間又は一日の勞働を他の仕事に於ける同じ持續期間の勞働と比較することの困難を、看過して居ると考へられては困る。』²⁾のであるが、併し、

『勞働の種々異なる質の評価は、直ちに市場に於て、總ての實際上の目的に合するやうに按排せられ、而してそは多く、勞働者の比較的熟練、及び爲されたる勞働の烈度如何に依つて定まる。一度此段階が定まるならば、そは殆んど變動を受けないものである。若し玉工の一日の勞働が普通勞働者の一日の勞働よりも價值ありとせば、その勞働は、長き以前より、價值の段階に於ける適當なる位地に按排され、配置され來たつたのである。』

『それ故に、時期を異にして同一商品の價值を比較するには、その特定商品の生産に要したる勞働の相對的熟練及び烈度を考慮することは、殆んど必要がない、蓋し勞働は何時に於て同様に

1) Marx, Das Kapital, I. S. 150. 高島氏譯本(三一九頁)に據る。
2) Ricardo, Principles, p. 15.

作用して居るからである。或時に於ける或種の労働が、他の時に於ける同種の労働に比較されて居るのである。若し労働が、十分の一、五分の一、或は四分の一増加され又は減少されたならば、それに比例せる結果が、其商品の相對價值の上に起るであらう。¹⁾』

その理由によつて、彼は労働を量的にのみ觀察したのである。

扱て、労働を量的にのみ考へるといふ點に就ては、マルクスもリカアドと同様である。併し乍ら、リカアドが、總ての労働は各々質を異にして居るけれども、市場に於て評價せられて、自ら其間に數量的段階は定まり、而してそが一旦定まつた以上は容易に變更しないものであるから、吾々は各種労働の質的差異を一々考慮する必要がなく、單に量的にのみ見れば良い、と言つたのと異り、マルクスは、具體的の諸生産目的を離れたる、等一なる抽象的労働なる概念を想定し、之を以て貨物の價值の實質をなす所の労働となし、斯くて質的に異なる労働も、價值の實體としては量的にのみ考慮さるゝことを、明かにしたのである。²⁾而してマルクスに従へば、熟練労働とは畢竟複雑なる労働の意であつて、不熟練労働即ち單純労働の中に含まれて居る抽象的労働の分量の幾倍かを保有して居る——そが幾倍に當るやを決定するものは、社會の慣習である——ものと觀れば良いのである。

(二) 價值の實質をなす所の労働の分量を測定する標準として労働時間を採用したることは、リカアドもマルクスも同様であるが、既に述べたる如く、⁴⁾マルクスは、より明確に此事を論述したる點に於て、リカアドに勝つて居る。

1) *Ibid.* pp. 15-16.

2) Marx, *Das Kapital*, I. S. 4 und 5. 参照

3) Marx, a. a. O., S. II. 参照

4) 本誌第十一卷三號第八七頁乃至八八頁参照

尙ほ、貨物の價值を測定する標準勞動が、如何なる勞動者の支出になれるものであるべきかに就ては、リカアドは次の如く述べて居る。

『總ての貨物——それが製造されたものであらうと、或は鑛山の生産物であらうと、或は土地の生産物であらうとに拘らず——の交換價值は、極めて有利なる事情、そうして生産の特殊の便宜を有する所の人々によつてのみ享受さるゝ事情、の下に於て、其生産に十分である所の、より少い勞動量に依つてゝはなくて、斯かる便宜を有たない所の人々に依つて、即ち最も不利なる事情の下にそれ等を生産し續くる所の人々に依つて——最も不利なる事情とは、要求さるゝ生産物の分量が、その下に於て生産を繼續することを必要とする所の、最も不利なる事情をいふ——必然的に其生産に費さるゝ、よい多い勞動量によつて常に支配せらるゝ』¹⁾

是に由れば、貨物の價值を決定するものは、個々の貨物の生産に眞實に必要な勞動量ではなくて、生産に最大の困難を伴ふ部分の貨物——勿論それに對して社會の需要がなければならぬ——が含有する所の勞動量である、とリカアドが考へたるは明かである。然るにマルクスは、貨物の價值を測定する標準勞動として、世間普通に流行して居る生産方法によつて生産するに必要な勞動、即ち所謂『社會的に必要な勞動』なる概念を、認めて居る。²⁾ リカアドは最大の勞動量と謂ひ、マルクスは平均的勞動量と謂ふ。両者の意見の差を觀るべきである。

(ホ) リカアドが特に論ぜんと欲したるは、貨物の相對價值及び其の變動であつて、その絕對價值及び其の變動ではない。即ち彼は、一貨物を他の貨物に對比せしめて考へたる場合に於ける兩

1) Ricardo, Principles, p. 50.

2) 本誌第十一卷第三號拙稿參照

者の交換關係を論じ、且つその關係の變動の原因を説明せんと欲したのであつて、各々の貨物の有する絶対價值に就ては、何等重きを置かなかつたのである。曰く、

『余が讀者の注意を惹かんことを欲する所の研究は、商品の相對價值の變動の結果に關するものであつて、その絶対價值のそれに關するものではないから、各異れる種類の人間労働を評價して、その比較的阶段を研究することは、餘り重要ではないであらう。』¹⁾

蓋しこは、彼が『若し現在及び總ての時に於て、生産に正確に同一の労働量を要する或一つの貨物が發見さるゝならば、その貨物こそは不變の價值を有するものであつて、他の物の價值變動を測定する標準として極めて有用であらう。』と考へたるにも拘らず、労働さへも其價值が可變である以上、其他に斯かる貨物を發見することは困難であり、『従つて、價值(こは絶対價值の意である——譯者註)の成る標準を選定することは不可能である。』²⁾ことに想到し、たゞ貨物の相對價值に於ける諸變動の原因及び其程度を研究するの外なしと看做したるが故である。

之れに關連して吾々の注意すべきは、マルクスの態度である。彼は、リカアド所謂相對價值又は交換價值に相當する概念を、交換價值なる名稱の下に説明したるのみならず、其れ以外に、絶對の意味に於ける價值、即ちリカアドの所謂絶対價值に相當する概念として、單に『價值』なる語を使用し、而して交換價值に至る前提概念として、先づ此の『價值』を釋明して居る。³⁾これ彼がリカアドと異なる點である。

(へ) リカアドは、貨物の價值がその生産に必要な労働の分量に依つて測定さるゝとの労働價值

1) Ricardo, Principles, p. 16.

2) *Ibid.* p. 12.

3) *Ibid.* pp. 10-11. 參照

4) *Ibid.* p. 12.

5) 此點に關する詳細なる説明は、本誌前々編(第十一卷第二號)の拙稿を參照すべし

原則を最後まで固持することが出来なかつた。即ち彼は、此原則に修正を加へざるを得なくなつた。

第一章第四節の冒頭に於て、彼は次の如く言つて居る。

『貨物の生産に費されたる労働の分量が、其相對價值を左右するといふ原則は、機械及び其他の固定的、持續的資本の使用に依つて、著しく修正せらる。』¹⁾

此點は極めて重要にして且つ興味ある問題である。殊に、そはリカアドの價值論及び利潤論をマルクスの價值論及び剩餘價值論に比較する上に於て、之が解決の鑰を提供するものである。然らばリカアドは、貨物の相對價值の不同を惹起する原因はその生産に必要な労働の分量の多少であるとの原則に對し、如何なる理由に本いて、如何なる修正を施さんと欲するのであらうか。

彼は先づ、貨物の生産には、「直接の労働」の外に、「集積されたる過去の労働」——即ち各種の資本(今日所謂資本財に相當す)——が必要なることを認めた。(本論文(ロ参照))

而して次に、彼は、『社會の各狀態の下に於ては、各種の職業に在つて使用さるゝ道具、器具、建物及び機械は、悉く耐久力の程度を異にし、』²⁾又、『労働を支持する爲めの資本と、道具、機械及び建物に放下さるゝ資本との間に於ける比例も、其の組合せが種々雑多である』³⁾ことに氣付いた。

然る後に彼は、『固定資本の耐久力の程度に此差異あること、及び二種の資本(即ち固定資本と流動資本⁴⁾)の組合はさるゝ比例に此相違あることは、貨物の相對價值の不同を惹起する原因として、貨物の生産に必要な労働の分量の多少といふこと以外に、他の一原因を引き入れる』⁵⁾ものと

1) Ricardo, Principles, p. 23.

2) Ibid. p. 24.

3) Ibid. p. 24.

4) 譯者挿入

5) Ricardo, Principles, p. 24.

解したのである。

(a) 二種の資本の組合はさるゝ比例に相違あることが、相對價值を左右する原因となる、といふ理由を、リカアドは、次のやうな極端なる場合を假設して、説明して居る。(説明の便宜上、次の例に於てはリカアドの用ひたる例に多少の變更を加へた。)

假りに、或人が、一〇〇名の労働者を、一年間、一つの機械の建造に使用し、他の一人が、同数の労働者を、同一期間、穀物の栽培に使用せよ。然るときは其年の終に於て出來上れる機械と其年に收穫さるゝ穀物とは、價值に於て全然同一であらう。次に、翌年に其機械を所有する人が、布を造る爲めに、一〇〇名を使用し、而して農業者は、以前の如く穀作に一〇〇名を使用すると假定せよ。然るときは、布は二〇〇名の労働者の労働を含有し(機械は一年間の使用に耐ふるものと假想す)穀物は一〇〇名の労働者の労働を含有するが故に、布は正に穀物の二倍の價值を有するが如くである。例へば、各労働者に對して年に五〇磅宛支拂ひ、而して利潤率を一〇パーセントなりとすれば、機械及び穀物は五五〇〇磅の價值を有し、布は一一〇〇〇磅の價值を有するが如くである。併し乍ら、實は布の價值は穀物のその二倍以上を、即ち一一〇〇〇磅より以上を、保つて居るのである。其理如何。曰く。第一年目に於ける農業者資本に對する利潤(五五〇〇磅)は消費されたるに反し、布製造業者の固定資本(即ち機械)に附隨せる利潤は、其儘に保存せられ、第二年目に於て、資本の形を以て出現し、他の資本と同様、一定率の利潤を要求するが故である。即ち數字を以て言ひ表はすならば、穀物の價值は、 $5000 \times (1 + 0.1) = 5500$ なるも、布の價值は $5000 \times$

1) 數を簡單にするが爲めに、布の原料を全く無視した。

$$(1+0.1) + 5000^{\text{ポンド}} \times (1+0.1) = 11000^{\text{ポンド}} \text{にあらずして} \quad 5000^{\text{ポンド}} \times (1+0.1) (1+0.1) + 5500^{\text{ポンド}} \times (1+0.1) \\ = 11500^{\text{ポンド}} \text{でなければならぬからである。}$$

斯くてリカアドは、次の結論を下して居る。

『然らば、爰に資本家があつて、彼等は彼等の貨物の生産に、年々正に同一量の労働を使用し乍ら、而かも彼等の生産する財は、銘々の人によつて使用さるゝ固定資本、即ち蓄積されたる労働、の分量の異なる爲めに、價值を異にする場合がある。……穀物は此等の貨物（即ち布等）と同一價值のものではない、（即ち余の例に就て言へば、布は、穀物の二倍以上の價值を有つて居る、）何故なれば、穀物は、固定資本に關する限りに於て異りたる事情の下に生産さるゝから。』¹⁾

次にリカアドは、以上の場合に於て賃金の騰貴が如何にして貨物の相對價值に影響するかについて、説明を下して居る。

賃金の騰貴は、必然的に利潤の下落を伴ひ、而して利潤の下落は、布製造業者をして、『彼等の固定資本（即ち機械）に對する利潤として、彼等の財の通常の價格（即ち五五〇〇ポンド）に、五五〇〇ポンドを附加する代りに、その類に、九バアセント即ち四九五ポンドをしか附加する』²⁾を得ざらしめ、從つて布の價值は、一一五五〇ポンドの代りに一一四九五ポンドとなる。然るに穀物は依然として五五〇〇ポンドであるから、布と穀物との相對價值の比は、

$$11500^{\text{ポンド}} : 5500^{\text{ポンド}} = 2.1 : 1.45$$

$$11495^{\text{ポンド}} : 5500^{\text{ポンド}} = 2.09 : 1 \text{ に變更する。}$$

1) Ricardo, Principles, p. 28.

2) Ibid. p. 29.

上掲の例は、リカアドが示したるものに多少數字上の變更を加へたものであるが、吾々はリカアドの所謂賃金の騰貴即ち利潤の下落が、總ての職業に、即ち此場合は農作業と布製造業とに、一様に發生する場合を考へても、同じ結果を得ることが出來やうと思ふ。詳しく言へば、賃金の騰貴による所の、一〇パーセントより九パーセントへの利潤の下落が、布製造業者の固定資本に對してのみならず、農業者の流動資本及び布製造業者の流動資本に對しても發生する場合を考へて、同じ結果を得ることが出來るであらう。是に由れば、計算は次の如くにならなければならぬ。

布の價值 $15000^{\text{舊}} \times (1+0.09) \times (1+0.09) + 5000^{\text{舊}} \times (1+0.09) = 11390^{\text{新}}.5$

穀物の價值 $5000^{\text{舊}} \times (1+0.09) = 5450^{\text{新}}$

両價值の比 $11390^{\text{新}}.5 : 5450^{\text{新}} = 2.09 : 1$

固定資本と流動資本との組合せの一樣ならざることが、生産に要する勞働の分量以外に、貨物の相對的價值を支配する原因となることに對して、リカアドが與へたる理由は、以上述ぶる所により明白になつたのであるが、只看過すべからざるは、彼が『貨物(の價值)の變動の、此種の原因は、其效果に於て比較的輕微なること』を附論して居ることである。彼は曰ふ、

『利潤に於て一パーセントの下落を惹起するやうな賃金の騰貴を以てしても、余が假定したる事情の下に於て生産されたる財は、相對價值に於て、たゞ一パーセント變動するのみである。』又『利潤は、恐らく如何なる事情の下に於ても、それだけ(即ち六、七パーセント)より大いなる一

1) *Ibid.* p. 29.

2) *Ibid.* p. 29.

般的且つ持續的下落を許すことは出来ない。¹⁾』

然れども惟ふに、假ひ此種の原因より惹起されたる相對價値の變動は、リカアドの言ふが如く實際の數字の上に於て極めて輕微であらうとも、尙ほそが勞働價値の原則を著しく修正したる點に於て、理論上極めて重大なる結果を齎らせることは、之を拒むを得ない。

(b) 次にリカアドは、固定資本の耐久力の程度に差あることが、貨物の相對價値に影響を及ぼすの理由に就て、説明を加へて居る。今、分り易からんが爲め、リカアドの示したる例に、多少の變更を加へ又言葉を挾んで、其主旨の存する所を解説すれば、左の如くなるであらうと思ふ。今假りに、余が、二〇〇〇〇磅の値ある機械を所有し、而して斯かる機械の磨滅損耗は極めて些細なものであるとし、そうして利潤の一般率を一〇パーセントであるとするならば、余は機械を使用せるの故を以て、財の價格に、二〇〇〇磅より以上餘り多くを、利潤として附加すべきことを要求しないであらう。即ち機械の持續年限を一〇〇年とするならば、一〇〇分の二〇〇〇磅即ち二〇〇磅の附加利潤を要求するのみであらう。併し乍ら、同一の價値を有する他の種類の機械にして、其磨滅損耗が甚だ大であり、從つて夫れを常に有效の狀態に維持するに要する勞働の分量が、年々五〇名の勞働者のそれであるとするならば、余は、或る他の資本家——他の財の生産に五〇名を使用し、而して全く機械を使用しない所の——によつて取得さるゝ所に等しいだけの附加價値を、要求するであらう。斯くて前の機械によつて生産さるゝ貨物は、後の機械に依つて生産さるゝそれに比して、割合に多くの固定資本を——或は同じ事であるが、割合に少ない

1) *Ibid.* p. 29.

流動資本を要することゝなり、従つてa)の場合と同様なる事柄が價值原則について論ぜらるゝのである。

以上述ぶる所により、吾々は、貨物の生産に要する資本の組成が一樣ならざること、及び資本の持續性に相違あることが、賃金の騰落と共に、貨物の相對價值に影響を及ぼす、このリカアドの所説の大要を吟味し終へたのである。

斯様にして、第一章第一節の冒頭に於て、『貨物の價值は、……その生産に必要な勞働に對して支拂はるゝ報酬の大小に依つて定まるものではない。』¹⁾との命題を置きたるリカアドは、今や第五節の冒頭に於て、『價值は、賃金の騰貴又は下落と共に變動せず、この原則も亦、資本の耐久力の不等なることによつて、及び資本が其使用者に回收さるゝ速度の不等なること——(換言すれば固定資本と流通資本との組合せが一樣ならざること)——²⁾によつて、修正さる。』³⁾と述べて、彼が純然たる勞働價值論を終始一貫して維持し得ざることを告白して居る。

然るに、吾々は、以上リカアドが勞働價值の原則に加へたる修正論の如きものを、マルクスの價值論中に於ては發見することが出来ない。果して然らば、勞働價值論は、之を終始一貫し得ざるが正當なのであらうか。或は之を矛盾なく終始一貫し得るのであらうか。此等の點に就ては、以下項を改めて述ぶることゝする。

1) *Ibid.* p. 5.

2) 譯者挿入

3) Ricardo, Principles, p. 33.